

青年期の友人関係の発達的研究

—— アイデンティティとの関連で ——

生 田 友 里

I. 問題と目的

青年期には、それまで親との関係が非常に重要であったのに対し、友人との関係を重要視するようになる。Douvan & Adelson (1966) によれば、Erikson (1959) が青年期の心理社会的発達における課題として掲げた“自我同一性 (アイデンティティ)” の統合をしていくためにも、友人は青年にとって大きな意味をもつ。Conger (1977) も、友人は、アイデンティティを定義していく手助けをするだけでなく、それを信頼させ、誇りを持たせるものだとして述べている。また、友人関係と適応との関わりについて述べた研究も多く、青年にとって友人関係が重要であることは明らかであろう。しかし、未だ青年期の友人関係については、実証的に十分な研究がなされているとは言えない。

青年期と呼ばれる時期の間にも、友人の持つ意味は変化していく (Conger, Douvan & Adelson)。その多くは、青年期前期 (中学生年代) には、外面的な結び付きを重視しているのが、青年期中期 (高校生年代) には、より内面的な結び付きを重視するようになり、さらに青年期後期 (大学生年代) には、信頼を重要としつつも互いの異質性を受容し、尊重できるようになる、という流れを含んでいる。こういう変化をすることの裏には、青年が自己に関する感覚を確立し、肯定的な自己概念を構成していくことによって、互いの個性に気付くことが考えられる。

そこで、今回の研究では、年齢が進むにつれて、外面的な結び付きを重視する傾向 (共通の行動や相互作用によって表層的に結び付くこと) から、内面的な結び付きを重視する傾向 (互いの気持ちや感情を分かちあい、頼り合い、信頼できることによって結び付くこと) へと移行し、さらに異質性を受容できる (相手を一人の人間として自分との違いを認め、また自分が相手に一人の人間として認められていると感じる) ようになる、という方向性が見出されるかどうかを実証的に研究する。また、従来男性と女性とでは、アイデンティティの確立において差が認められている。アイデンティティと親密性に関する研究では、女性のアイデンティティの確立は対人関係の中でなされること、また男性はアイデンティティが確立されているかどうかを親密性を確立していくことの

前提となることなどが、論じられている。そこで、今回の研究では、友人関係とアイデンティティとの関わりを検討することによって、性差について論じる。

<目的1> 青年期の友人関係の発達の様相を明らかにする。

仮説1-1: 外面的結び付きは年齢が進むにつれ重視されなくなる。

仮説1-2: 内面的結び付きは中学よりも高校・大学の方が重視されるようになる。

仮説1-3: 異質性の受容は年齢が高くなるにつれ進む。

<目的2> 友人関係における性差を明らかにする。

仮説2-1: 外面的結び付きは女子が男子より重視する。

仮説2-2: 内面的結び付きは女子が男子より重視する。

仮説2-3: 異質性の受容は性差なし。

<目的3> 自我同一性の確立との関連で友人関係をとらえる。

仮説3-1: 自我同一性の確立は異質性の受容と関連する。

仮説3-2: 女子は男子より友人関係と自我同一性が強く結び付く。

II. 方法

友人関係に関する質問項目は、“外面的結び付き”、“内面的結び付き”、“異質性の受容”に該当すると思われる概念、記述を従来の研究より選び、それに沿った質問項目を設定し、予備調査 (心理学専攻大学院生に実施) によって、妥当性を検討した。70項目 (外面的結び付き尺度33項目、内面的結び付き尺度22項目、異質性の受容尺度15項目) からなる。

アイデンティティ尺度は、古沢 (1968) のものを用いる。38項目。

被験者は、中学生284名 (男子147名、女子137名)、高校生255名 (男子137名、女子118名)、大学生277名 (男子127名、女子150名)、計816名。

III. 結果と考察

項目のいくつかを削除し、最終的に外面的結び付き尺度29項目、内面的結び付き尺度20項目、異質性の受容尺

度13項目、アイデンティティ尺度33項目が採用された。因子分析の結果、外面的結び付き尺度については3因子が抽出された（Ⅰ．話し合い・距離の近さ、Ⅱ．放課後の相互作用、Ⅲ．学校場面の相互作用）。またアイデンティティ尺度では、5因子が抽出された（Ⅰ．積極性・決定能力、Ⅱ．自己受容・自尊心、Ⅲ．他者に煩わされない力、Ⅳ．落ち着いて行動する力、Ⅴ．親密感）また、各尺度の信頼性（内部一貫性、 α 係数）は、外面的結び付き尺度0.89、内面的結び付き尺度0.94、異質性の受容尺度0.89、アイデンティティ尺度0.90と高かった。

発達差の分析…外面的結び付きに関しては、有意な差はあまり見られなかったが、全体的な方向性としては、中学生よりも大学生のほうが低くなることがうかがえた。内面的結び付きに関しては、全体として中学生で有意に低く、高校生や大学生の方が高かった。このことから、青年期になると次第に深いレベルのつきあいを求めるという傾向がうかがえる。また、女子では高校生が中学生や大学生よりも有意に高く、男子でもこの傾向が有意ではないが認められた。Conger では、後期になっても信頼や誠実さは必要とされているが、今回の研究では、むしろ後期になると精神的密着状態を脱していく傾向を示唆する結果が得られたと言えよう。異質性の受容に関しては、中学生より高校生や大学生の方が有意に高いという結果が得られた。しかし、内面的結び付きと同様、高校生が最も高くなっており、今後より明確に異質性の受容についてとらえられる尺度を構成することが、必要であると考えられた。

性差の分析…いずれのカテゴリーにおいても、女子のほうが男子より高い得点を示した。このことから、青年期においては女子のほうが男子より友人との強い結び付きを求める、という方向性が確かめられた。また、異質性の受容についても女子の方が高かったのは、女子の方が友人に対して密着的であるために、異質性に目を向けなくて関係を良好に保とうとするためであるのかもしれない。今後、異質性を受容するということが、相手の自分と違う良い面のみを認めるということであるのか、良い面・悪い面含めての統合されたイメージをもつことなのか、違いをただ黙認するだけなのか、明確にした上で

再検討することがのぞまれる。

アイデンティティと友人関係の関連の分析…異質性の受容尺度はアイデンティティ尺度と有意な正の相関が見られ、その傾向は大学生でもっとも顕著であった。アイデンティティが最も問題となる時期は青年期の後期であるため、最も顕著な傾向が見られるのも後期になったと考えられる。また、女子は友人関係の中でアイデンティティを定義する（Gilligan, 1982）ため、友人関係とアイデンティティとは密接に結び付くという予想に関しても、特に大学生の女子で予想を裏付ける結果となった。つまり、高校生や中学生、また大学生の男子に比べてみると、大学生の女子はアイデンティティ尺度と友人関係の各尺度との間に、より有意な相関が見られる。この傾向が男子であまり見られないのは、男子にとってはアイデンティティの確立が親密性の確立の前提となるということから、女子とは異なる時期、異なる形でアイデンティティが確立されてくることが、考えられる。また、男子は“他者に煩わされない力”が強い者ほど、友人と強く結び付かない、という傾向が見られるが、女子ではそのような傾向はなく、むしろ女子では親密な他者の存在を感じられること（“親密度”）と友人関係が深く関係しているようであった。このことは、女子がアイデンティティ確立において、個人内（intrapersonal）の側面より個人間（interpersonal）の側面を重視し、男子は個人内の側面を重視する（Hodgson & Fischer, 1979）という指摘と矛盾しない。

以上述べたように、仮説1-1は検証されなかったが方向性としては仮説どおりのものが見られ、仮説1-3は部分的に検証され、仮説2-3は検証されなかった。残りの仮説についてはすべて検証された。

また、補足的に設定した質問により、大学生になると男女共に、異性の友人がいる者の方が、同性の友人とも親しく付き合えるという傾向が見られた。このことは、Erikson の設定した次の段階である親密性の確立（同性・異性と親密な関係をもつこと）の、前段階としての青年期後期の特徴であろう。今後、異性の友人について研究していくことによって、より青年期と成人期のつながりが明らかにできるものと思われる。